立命館地理学　第 30 号（2018）101-109

コンテンツツーリズム推進地域における中心商店街の変化

―鳥取県境港市「水木しげるロード」を事例に―

内海　敬人 *・高橋　早紀 *・半谷麻美子 *・芳野　尚吾 *・河原　典史 **

Ⅰ．はじめに

現在、地方都市の中心商店街の衰退が大きな社会問題となっている。閉業した店舗が連なる商店街は「シャッター街」という言葉に置き換えられ、地元住民の生活に影響を及ぼしている。その要因には、大型ショッピングセンターや郊外型スーパーの進出による来街者の減少などが挙げられる。これらに関する先行研究として、例えば五十嵐（1996）の富山市における中心商店街の構造変化について業種構成から考察した研究がある[1)]。そこでは、歩行者通行量や経営者意識が聞き取り調査によって明らかにされている。次に埼玉県川越市の一番街商店街を事例に、溝尾・菅原（2000）は歴史的景観の統一による商店街振興について、住民と行政の両者に注目して考察している[2)]。その際、観光客へのアンケート調査や消費行動によって、観光地化による商店街振興が紹介されている。また、安倉（2007）は、愛媛県今治市の中心商店街における女性団体の活動を事例に、既存の組織とは異なる仲間型組織の独自な活動が商店街再生の一翼を担う可能性を指摘した[3)]。このように地理学では、中心商店街の再生過程における地域的な影響が分析されてきた。ただし、業種構成の変化について経営者属性との関係性から論じたものは少ない。

本稿では、こうした観点から中心商店街の振興策のうち観光振興を事例として、業種構成の変化と経営者との関係性について焦点を当てる。かかる点の検討にあたり、コンテンツツーリズムから検討する。この新しいツーリズムは、一般にアニメやマンガ、キャラクターといったコンテンツに誘発される観光行動や、それらを活用した観光振興を指す[4)]。この観光形態は、観光客の消費行動による経済効果や地域住民との交流の場の創造が期待されることから、地域振興に活用しようとする地域も少なくない[5)]。

本研究の対象地域は、鳥取県境港市の中心商店街である。境港は江戸時代から山陰地方の主要港として発展した。しかし、産業の変化にともなう経済の中心地の移動により、

*　立命館大学文学部・学部生
** 立命館大学文学部
キーワード：商店街振興、外来経営者、空家利用、ゲゲゲの鬼太郎
Key words：Shopping District Promotion, Outpatient Manager, Using of Vacant House, *Gegege no Kitaro* (Character of Japanese Animation)

1980年代後半には中心商店街が衰退していた。そこで、商店街の活性化を図るため水木しげる作品のキャラクターを活用した観光振興が行われている。

境港市のコンテンツツーリズムをめぐっては、まず澤田（2005）の「水木しげるロード」の経済効果について店舗経営者へ聞き取り調査を行った研究がある[6)]。さらに澤田（2009）は、「水木しげるロード」沿いの店舗について、1993年と2007年との業種の変化を検討している[7)]。しかし、近年の動向、とりわけ経営者の属性に注目した地理学的分析を行った研究は管見の限り見当たらない。コンテンツツーリズムの展開による業種の変化や、それにともなう新規参入者の動向は看過できないはずである。こうした現状から、本稿では境港市のコンテンツツーリズムに焦点を当て、中心商店街における業種構成の変化を経営者の属性との関係性から考察する。考察するにあたって、境港市の統計資料や住宅地図の分析、現地でのフィールドワーク、とりわけ新規参入した各店舗の経営者に関する聞き取り調査を行った。

II．通運業拠点から水産関連業拠点としての境港

弓ヶ浜半島の北端に位置する鳥取県境港は、北方の島根半島が自然の防波堤となっている天然の良港である。そのため、海上交通の要衝として発展し、江戸時代中期以降には西廻り航路における寄港地であった当港は、山陰地方における最大規模の海運機能を持つ拠点となった。明治時代には、神戸－函館を結ぶ定期航路の中継地として機能した当地は、やがて中国大陸への貿易基地になった。

1900年代初頭には鉄道が敷設され[8)]、境港は海運機能と鉄道による陸運機能を兼ね揃えた地域に成長した[9)]。船舶の荷揚場所が旧国鉄境港駅へ拡張したことによって、東西方向に延びる中心商店街は形成された[10)]。

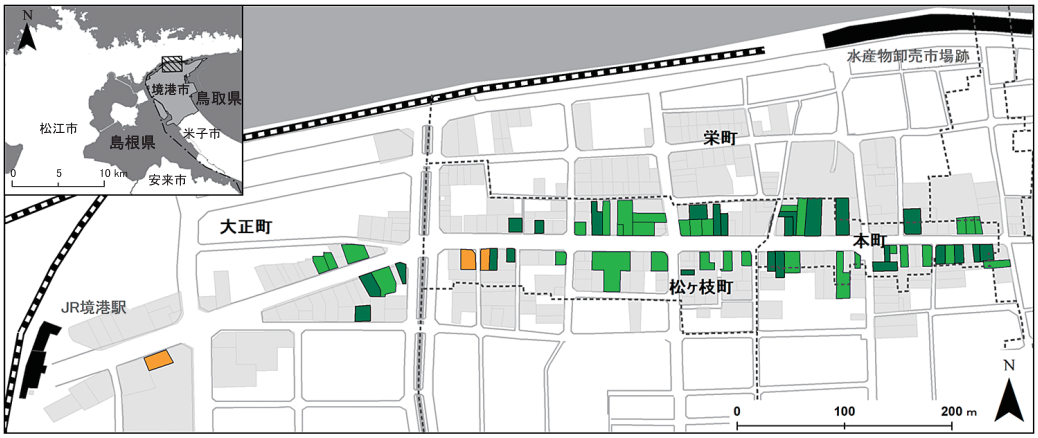
1950～60年代には、魚市場や水産物卸売市場などが栄町付近に開設され[11)]、地域住民向けの店舗だけでなく、水産関連業就業者を顧客とした嗜好品を扱う店舗もみられ始めた（第1図－A）。

しかし、高度経済成長期以降におけるトラック輸送方式の台頭、地方都市への大規模小売店舗の進出、水産関連業機能の移動[12)]による来街者の減少など複数の要因が重なり、中心商店街では閉店が相次いだ。特に旧国鉄境港駅が立地し、周辺に通運会社が集積していた大正町は、鉄道貨物の急速な衰退によって大きな打撃を受けたのである。

III.「水木しげるロード」の誕生と成長

境港市中心商店街の衰退を受け、1988年に境港市役所職員の14名によって構成される「街づくりプロジェクト委員会」が組織され、1990年に「緑と文化のまちづくりフォーラム」が開催された[13)]。この際、同市出身の漫画家である水木しげる[14)]の提言により、境港市は『ゲゲゲの鬼太郎』[15)]を観光に利用したまちづくりが行われるようになった。「水木しげるロード」は、中心商店街の歩道に妖怪ブロンズ像を設置して誕生した。

境港市の観光振興が進められた後の観光客入込数は、大きく3期に分けられる（第2図）。第Ⅰ期は1992年から2002年で、観光整備によって徐々に商店街への訪問客が増加した時期である。第Ⅰ期では、1991年より



A: 1987 年

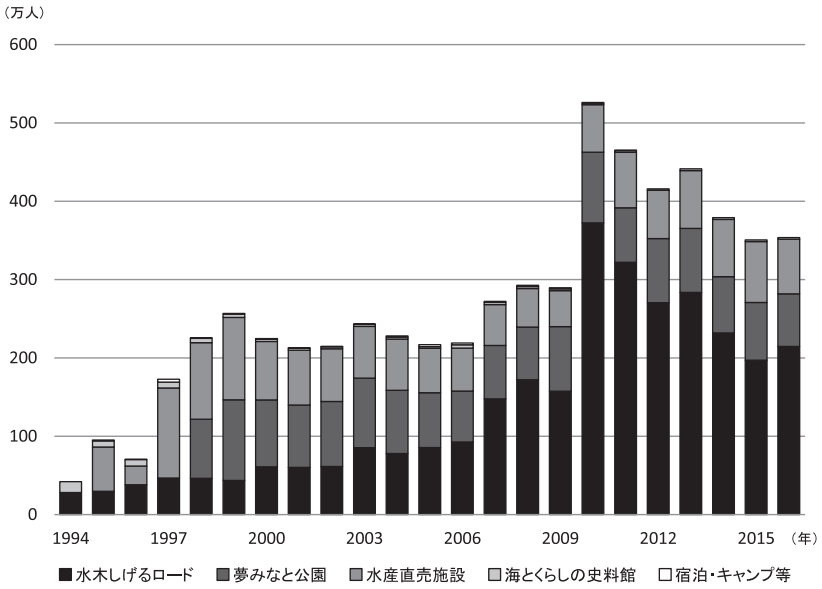
B: 1997 年

C: 2017 年

注：凡例はA・B・Cに共通している。

第１図　境港市中心商店街における店舗の立地変化

出所）A・Bは住宅地図、Cは聞き取り調査より作成。



第２図　境港市における観光施設別観光客入込客数

出所）境港市観光課資料より作成。

行われていた駅前の整備事業に連結し、翌年に「水木しげるロード」の整備が大正町から松ヶ枝町間で行われた。1993年には一部の「水木しげるロード」がオープンし、1996年に本町までの整備が完成を迎えた。その後、「夢みなと博覧会」[16]が開催された1997年には、駅前の整備事業の一つであった「みなとさかい交流館」[17]の竣工によって、観光地化に向けた整備が進行した。こうした観光整備が評価され、同年には建設庁の「手づくり郷土賞」[18]が授与された。また、1998年から2001年にかけて山陰自動車道の米子西―安来が開通した。伸び悩みはあったものの、黎明期に当たる第Ⅰ期において、中心商店街を含む「水木しげるロード」の入込客数が増加傾向にあった背景には、商店街内の観光整備や交通の利便性の高まりがあった。

続く第Ⅱ期は2003年から2009年の期間で、「水木しげるロード」が境港市の観光名所として成長した時期にあたる。この時期には、2003年の水木しげる記念館の開館[19]にともない、入込客数が増加していった。以降、2009年までこの傾向にあった期間は第Ⅱ期となる。当期では、『ゲゲゲの鬼太郎』に関する映像作品の公開やイベントの開催など、ソフト面の影響が大きい（第１表）。

まずハード面では、記念館開館の翌年に妖怪ブロンズ像の追加設置に向け、１体100万円でスポンサーの全国公募が開始された。2006年には鬼太郎フェリーの就航[20]、「ねずみ男列車」や「ねこ娘列車」の運行[21]など、当ロードと外部を結ぶ移動手段に対しても『ゲゲゲの鬼太郎』を用いた観光整備が行われた。その翌年には、商店街沿いにある休憩広場の噴水や外灯、ベンチなどに水木しげる作品のキャラクターのデザインが施された「妖怪広場」も整備された。

ソフト面では、2006年前後より商店街主

第１表　境港市中心商店街の発展史

発展段階	年	商店街周辺	水木しげるロード
整備以前	1860	北前船の寄港	
	1902		国鉄境線（境港―米子）の開通
	1951	重要港湾に指定	
	1962	水産物卸市場が成立（栄町）	
	1966	新産業都市に指定	
	1973	特定第三種漁港に指定	
		水産加工団地が造成（昭和町）	
	1982	水産物卸売市場の移転（昭和町）	
	1991		駅前整備事業（大正町）
第Ⅰ期	1993		水木しげるロード整備施行（～96年）
	1997		夢みなと博覧会
第Ⅱ期	2003		水木しげる記念館開館（本町）
	2005		映画「妖怪大戦争」公開
	2006		複数のイベントを開催
	2007		実写映画「ゲゲゲの鬼太郎」公開
第Ⅲ期	2010		NHK「ゲゲゲの女房」放送
			映画「ゲゲゲの女房」公開
	2011		舞台「ゲゲゲの女房」公演
	2012		水木しげる記念館リニューアル

出所）注7)、8)、9)、境港市「水木しげるロードリニューアル基本構想」https://www.city.sakaiminato.lg.jp/upload/user/00102924-4RPC7N.pdf　2017年11月23日閲覧より作成。

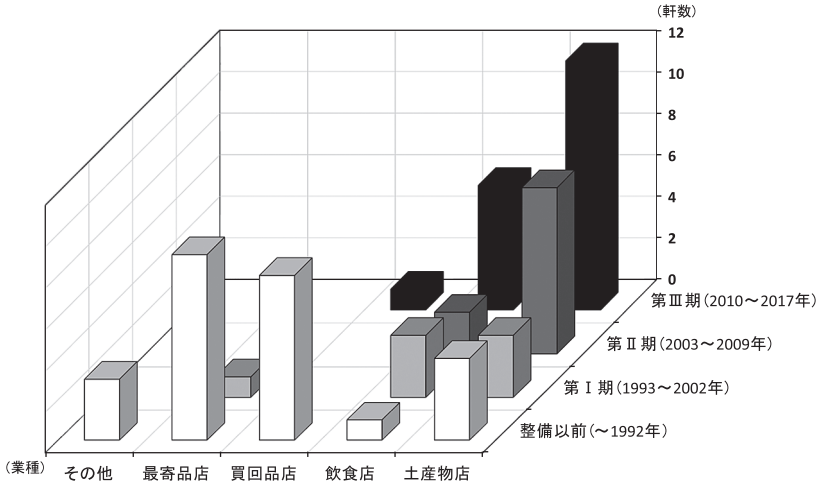
催で「第1回ゲゲゲのゲタつみ大会」をはじめとする『ゲゲゲの鬼太郎』に関連する複数のイベントが開催された[22)]。2007年には、実写映画『ゲゲゲの鬼太郎』が公開され[23)]、当ロードの観光入込客数に大きな増加がみられた。以降、当ロードは境港市観光入込客数のうち、半分以上の割当を占めていることから、境港市における主要な観光スポットとして成長した。特に2008年には第Ⅱ期で最多の約172万人を数えた観光客数の増加には、映画などの映像メディアの視聴を契機とした観光の流行があったのである。

Ⅳ．中心商店街における内部構造の変化

1．近年の動向

NHKドラマ『ゲゲゲの女房』[24)] の放送された2010年をピークに、境港市全体の観光入込客数は減少している。2010年以降のこの時期は、第Ⅲ期にあたる。近年では、境港港に海外からのクルーズ船が就航したことによって、外国人観光客が増加している[25)]。それにともない、積極的にインバウンド対応を行っている店舗もみられる。その一方で、急激な変化に苦しむ店舗も存在する。

2018年現在、「水木しげるロード」では改装工事が行われており、水木しげるキャラクターのブロンズ像の追加や商店街アーケードの撤去、夜間照明の設置が着工されている。



第3図　業種別にみた開業店舗数の推移

出所）聞き取り調査より作成。

また、車道を一方通行にすることで、歩道の拡張や滞留スペースが確保され、観光客が親しみやすい商店街になりつつある[26)]。

2. 観光地化にともなう内部構造の変化

「水木しげるロード」整備以前の1987年の中心商店街は、時計や呉服など耐久消費財を扱う買回品店や、日用品などを販売する最寄品店（以下、小売店）が多く建ち並んでいた（第2図－A）。しかし、第Ⅰ期の1997年では小売店が減少し、土産物店や観光関連施設が徐々に設置されていることがわかる（第1図－B）。現在の中心商店街を構成する店舗のうち、観光整備以前より開業していた店舗では小売店が多い。その一方、観光地としての整備が始まった第Ⅰ期以降に開業した店舗のほとんどは、観光関連業の店舗である。特に、土産物店の開業は第Ⅱ期以降に集中している（第3図）。

整備以降の業種変化にともない、観光関連業の経営主体にも変化がみられた[27)]。第2表をみると、現在39店舗のうち11店舗は整備以前から第Ⅰ期にかけて開業している。この時期に開業した観光関連業の経営者には一階を店舗、二階を自宅とする店舗兼用型を有する者が多い。また、彼らのほとんどは商店街付近に居住する地元経営者である。そのなかには一度閉業したものの、「水木しげるロード」整備後に、『ゲゲゲの鬼太郎』に関連した土産物を販売する店もみられた。また、整備以前より開業していた小売店でも鬼太郎に関連した土産物が販売されている（第4図）。そして、第Ⅱ期以降に開業した28店舗のうち、22店舗が貸店舗で営業している。そのうち、商店街以外の市内や市外から通勤する経営者は16店ある[28)]。

そして、第Ⅲ期の2017年になると土産店や観光関連施設が増加し、他の小売店は減少した（第1図－C）。増加した観光関連業の経営者は、第Ⅱ期同様に中心商店街周辺以外からの参入者であった。その一方、第Ⅲ期において貸店舗を利用している経営者は商店街周辺に自宅を持つ店舗が5店舗、その他市内に自宅を持つ店舗が4店舗みられる。これは、「水木しげるロード」の振興を目的とした地

第２表　観光関連業経営者の居住地と開業年

観光関連業			経営店舗の創業年					
			整備以前期	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	小計	総計
経営者の自宅／本社位置	店舗兼用	持家	3	4	0	0	7	7
		貸店舗	0	0	0	0	0	
	商店街周辺	持家	1	1	1	2	5	11
		貸店舗	1	0	0	5	6	
	その他の市内	持家	0	1	0	1	2	10
		貸店舗	0	0	4	4	8	
	市外県内	持家	0	0	1	0	1	6
		貸店舗	0	0	2	3	5	
	県外	持家	0	0	0	0	3	3
		貸店舗	0	0	1	2	0	
	不明	持家	0	0	1	0	1	2
		貸店舗	0	0	0	1	1	
	総計		5	6	10	18	39	

出所）聞き取り調査より作成。

第４図　「鬼太郎みやげ」を販売している店舗
観光整備以前より開業していた燃料販売店が、副業的に水木しげるキャラクターの商品を販売している。
（2017年８月３日　筆者ら撮影）

第５図　銀行跡を利用した土産物販売店
「水木しげるロード」の本町アーケード入口に位置し、外装にデザインを加えて土産物店が参入している。
（2017年８月３日　筆者ら撮影）

元まちづくり公社や、多店舗経営を行う地元企業が現れたからである。これらの企業は地元の食材を活かした土産物の開発や、『ゲゲゲの鬼太郎』に登場するキャラクターを使用した独自性のある土産物を販売している。

現在、貸店舗や空家の様々な利用形態がみられる。かつての銀行[29]は現在、水木しげるキャラクターを活用した菓子店となっている（第５図）。空家を店舗として利用するだけではなく、外観を古民家風に改装して観光地の雰囲気づくりに利用している例もある。一方、現在も空家になったままの建物も多く、今後の活用が期待される。

V．おわりに

本稿では、鳥取県境港市において中心商店街を構成する業種とその経営主体の変化を明らかにした。その結果、キャラクターを活用した商店街の観光地化において、関連する外来経営者が商機を目的に参入していることがわかった。彼らの参入は、商店街における観光整備の拡充を意味する。また、このような経営者は衰退した商店街に残る空家の活用など、観光地の雰囲気づくりにも貢献している。

しかし、特徴的であった空家活用と、観光基盤を支える外来経営者にかかわる検討は不充分である。行政や商店街振興会による取り組みや、地域住民経営者と外来経営者の協働意識について調査し、より詳細な商店街の内部構造変化をとらえることが必要である。

〔付記〕本稿は、立命館大学文学部地域観光学専攻で2017年度春学期に開講された「地域観光学応用研究」によるフィールドワークをまとめたものである。調査にあたり、資料提供や現地調査の御協力をいただいた水木しげるロード振興会会長の権田淳一様をはじめとする商店街の方々、境港市観光課や境港市教育委員会の皆様、ならびに当授業にTAとして御指導いただいた文学研究科地理学専修の森田耕平様に深く感謝いたします。調査結果については2017年度文学部ゼミナール大会で報告し、「最優秀賞」を受賞した。

注

1）　五十嵐篤（1996）「富山市における中心商店街の構造変化―経営者意識との関連性を含めて―」、人文地理、48(5)、6-59。

2）　溝尾良隆・菅原由美子（2000）「川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全」、人文地理、52(3)、300-315。

3）　安倉良二（2007）「愛媛県今治市における中心商店街の衰退と仲間型組織による再生への取り組み―「今治商店街おかみさん会」の活動を中心に―」、経済地理学年報、53(2)、173-197。

4）　岡本　健（2015）「コンテンツツーリズムを研究する」、岡本　健編『コンテンツツーリズム研究―情報社会の観光行動と地域振興―』、福村出版、10-13。

5）　山村は、熱心なファンがコンテンツに関連した場所へ訪れる行為を通じて、繰り返し来訪するうちに彼らが地域自体のファンとなり、結果として強力なリピーター兼まちづくりのサポーターとなっている事例から、コンテンツツーリズムによる観光まちづくりの可能性を指摘している。山村高淑（2009）『観光革命と21世紀―アニメ聖地巡礼型まちづくりに見るツーリズムの現代的意義と可能性―』、北海道大学観光学高等研究センター、3-28。

6）　澤田廉路（2005）「水木しげるロード整備等が及ぼす経済波及効果について」、公立鳥取大学TORCレポート、25、62-73。

7）　澤田廉路（2009）「境港市の『水木しげるロード』整備と商店街の変容に関する考察」、国際交通安全学会誌、34(1)、68-76。

8）　境線は1902年に米子―御来敷で開通した山陰本線の敷設工事のための資材運搬拠点として境（現在、境港）―米子を繋いだ支線である。1909年に「国有鉄道線路名称」が制定されたことで、境―米子に境線の名称がつけられた。1914年には現在の駅の位置から南に約600 mにあった停車場が、港と鉄道の連絡をより効率化するために、境駅が現在の位置（大正町）に移転後、1919年に境駅から境港駅に名称が変更された。1987年に国有鉄道が分割および民営化され、境線は西日本旅客鉄道の管轄下になった。①境港市編（1986）『境港市史―上巻―』、第一法規出版、789-853頁。②境港市編（1997）『新修境港市史―本文編―』、境港市、388-389頁。

9）　市南文一（1999）「古くからの港町　境港市」、平岡昭利編『中国・四国　地図で読む百年』、古今書院、93-100。

10）　現在の中心商店街は、1945年の陸軍輸送船「玉栄丸」の爆発事故からの戦災復興によって再建された街並みである。前掲8）①、654-663頁。

11）　前掲8）①、669-781頁。

12）　境港は、1973（昭和48）年に特定第三種漁港に指定されている。そのことを受け、境港市では漁港規模を拡大する必要性が生じ、弓ヶ浜半島北東部に埋立地（昭和町）が造成され、栄町に立地していた水産物卸売市場などの水産関連業や工業機能が当市東部へ集積した。①前掲8）①、669-781頁。②前掲9）。

13）　澤田廉路（2007）「境港市における観光活動設計のプロセスと今後の課題―水木しげるロード周辺の事例を中心として―」、TORCレポー

ト、30、61-78。

14） 1922年に大阪市で生まれ、鳥取県境港市で育つ。本名は武良茂。代表作として『ゲゲゲの鬼太郎』、『河童の三平』、『悪魔くん』などがある。

15）『ゲゲゲの鬼太郎』は、水木しげるによって1965年から1997年まで複数の漫画雑誌にわたって連載された漫画作品である。1960年から1964年まで連載された貸本『墓場鬼太郎』に端を発し、1968年以降7度にわたってテレビアニメが制作されている。

16）『夢みなと博覧会』は、「翔け、交流新時代へ」をテーマに1997年7月12日から9月28日まで鳥取県境港市で開催された地方博覧会である。

17） この施設は、観光案内所やフェリー乗り場、温泉サウナ施設、回転寿司店などの複合した機能を持つ。

18）「手づくり郷土賞」は、地域独自の自然や歴史、伝統、文化、地場産業などを活用した地域づくりを行っている地域に対し、その社会資本や当該活動を行っている団体を国土交通省が表彰するものである。他地域の受賞例としては、京都市の「三条通り歴史的かいわい景観地区」などがある。国土交通省ホームページ「手づくり郷土大賞」http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/tedukuri/what_furusato/what_furusato.html 2018年6月7日閲覧。

19） 水木しげる記念館は、料亭旅館の跡地に建設されたものである。

20）「鬼太郎フェリー」は、境港―隠岐を繋ぐフェリー「しらはま」（2,343 t）に鬼太郎のペイントが施されたものである。http://www.sakaiminato.net/site2/page/mizuki/news/2006/okikisen/ 2018年5月31日閲覧。

21） JR境線で運行している列車のうち、外装に『ゲゲゲの鬼太郎』のキャラクターのデザインが描かれているものである。2000年から「鬼太郎」列車の運行が開始されている。2018年1月時点では、「鬼太郎」、「ねずみ男」、「ねこ娘」、「目玉おやじ」、「こなき爺」、「砂かけ婆」の6種類が運行している。境港市観光ガイド「JR境線鬼太郎列車のご案内」http://www.sakaiminato.net/c817/map/youkairesshazikokuhyou/ 2018年6月1日閲覧。

22） 桝田知身（2010）『水木しげるロード奮闘記―妖怪によるまちづくり境港市観光協会の挑戦』、ハーベスト出版、28-42頁。

23） 2008年には実写版の2作目となる『ゲゲゲの鬼太郎―千年呪い歌―』が公開された。

24）『ゲゲゲの女房』は、水木しげるの妻である武良布枝の自著伝である。これを原案として、2010年3月29日から9月25日までNHK連続テレビ小説『ゲゲゲの女房』が放送された。

25） 境港市管理組合の発表によると、2014年に境港市へ寄港したクルーズ客船のうち、乗客の主要な国籍が海外であった船は9隻であったのに対し、2017年には32隻に増加している。境港市管理組合HP「寄港実績」http://www.sakai-port.com/publics/index/58/0/ 2018年6月24日閲覧。

26）『水木しげるロードリニューアルかわら版 No. 1』、境港市役所 水木しげるロードリニューアル推進課、2016年9月10日発行。

27） 具体的な業種や経営者の変化を明らかにするため、本調査ではJR境港駅から本町東端までの商店街の土産物店や飲食店、小売店の経営者に対象を絞り、以下の調査を実施した。調査項目は大きく分けて①店舗の基本情報、②経営者、③鬼太郎グッズの販売について聞き取り調査を実施し、全95店舗のうち61店舗から回答を得た。

28） 聞き取り調査では、「市外から自家用車で通勤している」、「隣の米子市で元々自営業を営んでいたが境港に店舗を移した」、「境港で産まれ、大学を出てUターンで観光関連業に就職している」などの回答がみられた。

29） 本町アーケード商店街の西端に松江相互銀行境支店（現在は第5図の菓子店）、東端には山陰合同銀行境本町支店（現在は駐車場）が立地していた。